



千葉県松戸市矢切地域における農業の存在形態 —農家の経営状況の分析を通して—

[キーワード: 松戸市, 近郊農業, 市街化調整区域, 販売経路, 矢切ねぎ]

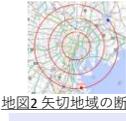
青山学院高等部2年 北澤 一真

I. はじめに

本研究では、千葉県松戸市矢切地域における農業の存在形態を、農家の経営状況の分析を踏まえて述べたものである。近年、大都市周辺では、宅地化の進行などといった「外的要因」、耕作放棄地や高齢化による担い手不足などといった「内的要因」の双方で営農に厳しい環境がみられている。

そこで、東京駅から15km圏内でありながらも大規模な農地が残されている矢切地域を事例に、都市周辺における営農形態を土地利用調査と聞き取り調査から明らかにした。分析にあたっては、2022年秋季学術大会高校生ポスターセッションの成果と課題を踏まえた。

地図1 矢切地域の位置



地図2 矢切地域の断面図



地図3 調査範囲



II. 研究対象地域

千葉県松戸市矢切地域は、江戸川を挟んで東京都と隣接しており、東京駅から15km圏内である(地図1)。下総台地に接する形で江戸川沿いに沖積平野が広がっている(地図2)。

江戸川沿いの沖積平野の大部分は市街化調整区域に指定されている。2019年の東京外環道開通により開発の外圧が強まっており、物流倉庫建設の計画も存在している(石原, 発行年不明)。そのため、矢切地域全体をより理解するためには、2022年の調査範囲である地図3の赤点線をさらに広げ、青点線で囲まれた、江戸川沿いの沖積平野全体で調査を行うことが必要であると考え、研究対象地域を設定した。

III. 調査方法

2023年7月24日~28日に、土地利用調査を行った(地図4)。また、同時に農業従事者を対象とした聞き取り調査を実施した。農業従事者の構成や耕地面積、作付品目、出荷先を尋ね、10件の回答を得た(表1)。作付が行われておらず雑草が生えている場所を、雑草の高さによって「短草」(約15cm以下)、「中草」(約30cm)、「長草」(約40cm以上)の3種類に区別した。これは、低い雑草のほうが最近まで人の手が土地に加わっていたと考えたからである。

IV. 結果と考察

地図4 現地調査(2023.7)の結果

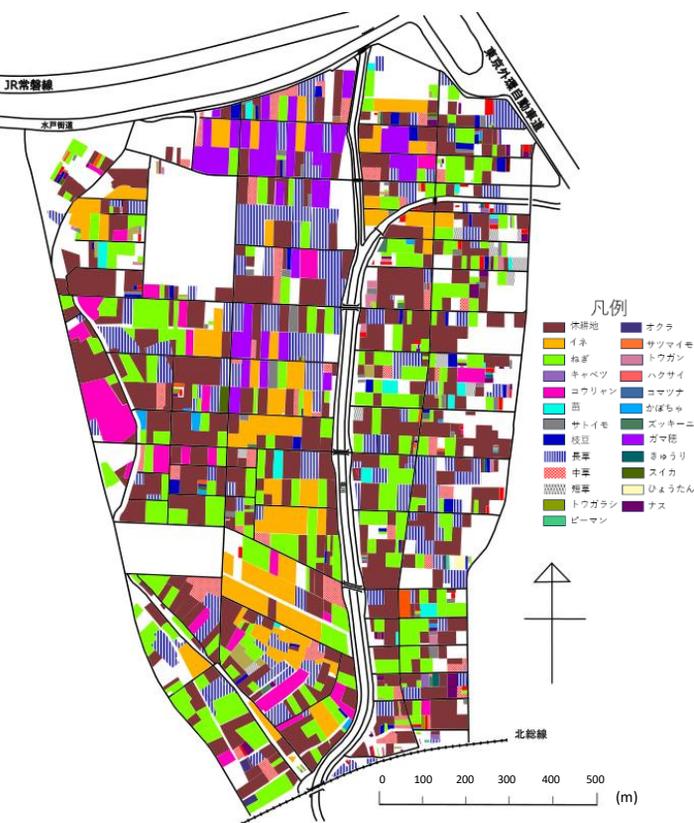
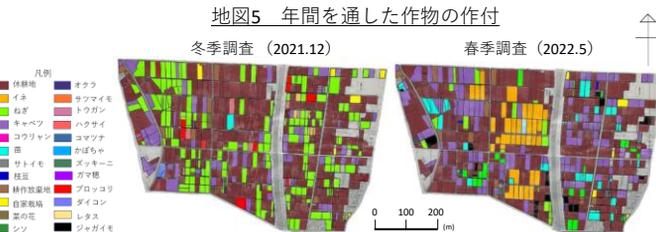


表1 聞き取り調査の結果

農家番号	農業従事者	耕地面積		作付品目と出荷先					
		所有	貸付	放棄	ねぎ	キャベツ	ブロッコリー	枝豆	その他
1	90代F	60代M	100a		船				
2	70代M	70代F	50代M	40代F	200a	市川			
3	80代M	80代F	50代M	100a	100a	松戸			
4	80代M	80代F	50代M	50代F★	100a	船			
5	70代M	70代F	50代M	50代F★	120a	船			
6	60代M	40代M	40代F★	200a	200a	東京大田			
7	50代M	50代F	20代F	90a	90a	船橋			
8	50代M	70代F	30代M	50a	50a	船、松戸			
9	80代M	80代F	40代M	40代F★	70a	200a	20a	船	
10	50代M	50代F★	130a		130a	松戸			

★は聞き取りを行った方を表す。●は、主要な収入源を表す。



地図6 ねぎとキャベツの作付

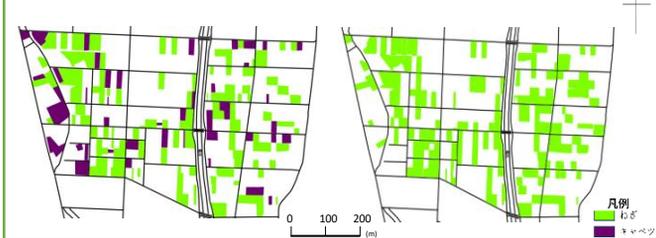


写真1 矢切地域で栽培されているねぎ



地図7 出荷先市場一覧図



地図4より、調査地域全体で多様な作物が栽培されていたが、特にねぎの栽培が多く見られた。また、北部では、他地域に比べガマ穂や長草が多くみられた。これは、聞き取り調査より、物流倉庫建設の計画が北部であることに伴って耕作を取りやめたと考えられるのではないかと考える。

表1・地図5・地図6から、秋・冬ねぎと春キャベツが卓越しており、それらを補完する形でブロッコリーや枝豆といった作物を栽培していることが分かった。また、農家の収入源の大半はねぎに依存していることが明らかとなった。これは、単に栽培面積の大きさだけでなく、「矢切ねぎ」というブランド価値によるものと考えられる。これらから、**矢切地域の農業は多品種少量生産の都市農業ではなく、近郊農業に近い形態であることがわかる。**

表1から、**営農はすべて家族のみで行っており、年齢層は70代から80代が多く、次いで40代や50代が多かった。**しかし、20代や30代の若い農業従事者も見られ、後継者のいる農家もあることが分かった。

表1から出荷先を見ると、柏市や松戸市にある市場(個選)に出荷する農家が多くみられ、市川市や船橋市の市場(個選)、大田市場(共選)に出荷する農家も見られた。聞き取り調査を行った複数の農家で、近年大田市場(共選)から柏市や松戸市の市場(個選)へ移行しているということも分かった。これは、大田市場が矢切地域から遠距離にあるため移動に時間がかかったり、体力的に厳しかったりすること、交通渋滞などにより時間がたみにくことが挙げられる。ただし、現在も大田市場に出荷している農家番号によると、時期によって値段が大きく変動せず収入が安定しているのが、大田市場に出荷する利点であるということが分かった。さらに、市場以外の出荷経路として、直売所での販売や、スーパーの地産地消コーナーへの出荷、更にはインターネットによる直販を行う農家もあった。このように、多数の出荷先を選択できるのは、矢切地域が人口密集地の中にあることが理由として考えられる。**農家が自分の経営方針に合った最適な方法で農作物を出荷できているのは、この地域で農業を行う1つの利点である**と考える。

V. まとめ

調査結果より、矢切地域の農家は栽培品目をねぎ、キャベツといった少品種に絞った農業を行っていることから、**東京圏15km圏内でありながら近郊農業のような形態であることが分かった。**都心からの距離を考えると、多品種少量生産で直売所を活用する都市農業が見られると仮定していたが、近郊農業のような様相を呈していた。これは、市街化調整区域でまとまった農地があること、「矢切ねぎ」というブランド価値が要因として考えられる。一方、販売方法を見ると、個選・共選での市場出荷に加え、インターネットによる直販、スーパーの地産地消コーナーへの出荷など、人口密集地であることを生かし、都市農業のような販売形態がみられた。つまり、**近郊農業のような様相を呈しているながらも、都市農業のような出荷形態であり、農家が自分の経営方針に合った方法で農作物を出荷できる環境である**ことが、この地域の農業の存在形態により大きな影響を与えていたことが分かった。対象地域では、物流倉庫などの開発圧力が強まっており、これを起因とする土地利用も見られる。今後、都心に近く、開発圧力の強い市街化調整区域であるこの地域で農業を維持していくためには、都市農業のような地域とのつながりを意識して、地域に必要なとされる農地であるような取り組みが必要ではないかと考える。

【参考文献】 石原修(2014): 続やきりの話 石原修(発行年不明): やきりの話